

平和首長会議『青少年「平和と交流」支援事業』報告書

サミュエル・ショー（マンチェスター市・英国） 2016年9月

本報告書は、平和首長会議夏期プログラムに対する先日の参加に関していくつかの側面に言及し、日本、より具体的には広島との関連における平和への個人的考察、並びにマンチェスターにおける今後の平和構築活動に対する実践的提言を含めるものとします。まず自己紹介とともにプログラムの趣意を説明してから、広島滞在中に学んだことについて詳述します。

広島には8月初旬の10日間、複数の立場で滞在しました。つまりさまざまな場所と機関をさまざまな形で代表したということです。プログラムの大半は広島市立大学（HCU）における短期集中講座で構成され、こちらへの参加は広島市役所にある平和首長会議事務局に手配していただきました。広島市とマンチェスター市は、平和首長会議への関与および主導的役割を通じて地方自治体レベルで交流があり、同会議は広島と同じく、マンチェスターにおいても地方自治体と地元大学を結びつけてきました。そのため今回の例では私は、マンチェスター市役所、そして学生メンバーとして所属するマンチェスター大学傘下の「人道主義・紛争対応研究所（HCRI）」、両者の代表として参加しました。広島滞在の当初、これらの多岐にわたる機関および地理的つながりは、概念的に整理するのに時間がかかりましたが、平和首長会議とHCUのスタッフによる温かい歓迎と親切な手引きで、容易に適応することができました。

HCUにおける短期講座の骨子は「今、あなたにとって平和が意味するものは？」という問題の考察を促すことでした。私は平和・紛争研究の修士課程に在籍中であることから、このことは研修の初めにあって、広島滞在に至るまでのすべての研究と経験を内省する機会になりました。HCRIで平和を批評的な文脈で研究し、学部課程で神学と哲学を修めたことから、平和などの抽象的な用語の定義という課題に向き合う場合、私は体系的な一般的定義を目指す傾向があります。往々にして理論的に！ 平和研究では、2つの主な概念区分に平和の定義を分類することができます。それは平和を紛争の不在または否認と見なす「消極的な平和」、そして平和を平和そのものとして定義する「積極的な平和」で、通常「平和的な事柄」、例えば、建設的な関係、正義、愛、許しなどの存在により定義される社会構造を指します。パレスチナ占領地区では、平和をめぐる議論はイスラエルの長期にわたる占領と不均衡な紛争により形成されています。私は同地区の問題に取り組み、同地区に滞在した2014年の経験から、なかでも正義の存在を積極的な平和の前提条件として重視しま

す。パレスチナ人の間では、公正な平和だけが平和を意味します。停戦により実現する可能性のある平和という考え方は不条理であり――占領とさまざまなその他の不公正が解消されないままである以上、消極的な「平和」は未解決の問題の多さを曖昧にし、それゆえに正義へのプロセスを妨害するものとして軽んじられるのです。

しかし紛争の不在は、積極的に公正な平和に不可欠な要素のようであり、多数の人にとってより直感的な概念です。パレスチナ人の証言が平和と正義に対する私の考え方に影響したように、被爆者そして広島の人々の証言全般も正義のプロセスが存在しない平和に対する私の考え方に影響を与えました。特に痛切なのは、かつての敵との和解プロセスがないなかで、「ヒロシマ」は同市をほぼ壊滅させた国を、もはや敵として見ていないという状況です。広島は通常 2 国間で行われる和平プロセスを単独で行ってきたように思えます。広島は平和都市宣言をすることで、戦争から背を向けました。再建において補償を自分で引き受けました。原爆後に残されたものをどうにか復興させました。アメリカと和解しました。ただし広島はプロセスを重視する社会正義ではなく、消極的な平和を強化する努力の中で、すべてを単独で行ったのです。広島をパレスチナ的な文脈における平和と正義から更に隔たったものにしてしているのは、紛争の歴史的な近接性です。71 年間の消極的な平和という差異があれば、平和活動に対して異なる重点と優先事項が双方の文脈において存在するのは当然です。広島は記憶と体験談を重視し――平和活動を通じて原爆による攻撃の生存者の人間的なストーリーを広め、守ろうとしています。この重点は、パレスチナの文脈にはなじみません。パレスチナでは新しい生存者の体験談が絶え間なく生まれ、また大半のパレスチナ人にとって、紛争に苦しんだ過去の歴史と集団的記憶を維持するという課題は、現在の不正義に積極的に抵抗することに比べて、重要度が二次的であると見なされています。

以上のことから、広島での体験により、HCU の講座や平和首長会議のプログラム、平和記念式典、被爆者の証言を通じて、私は消極的な平和の維持または構築のためには記憶と歴史が重要であるとの認識を新たにしました。日本とアメリカの間に悔恨と許しによる公正な関係はまだ生まれていないものの、広島はそれでもその苦しみを証言することで核兵器の恐ろしさを訴え、非難するだけでなく、過去または現在のいずれの抗議においても――解決手段としての軍国主義を否定することに尽力しています。だからこそ広島は、パレスチナのどの場所よりもマンチェスターに似ています。第二次大戦中に激しい爆撃を受けながら、その後 71 年間、消極的平和をほぼ途切れることなく享受してきたもう 1 つの都市がマンチェスターであるからです。イギリス常備軍の大部分が北部の都市出身の労働者階級の若者で構成されていたことから、追悼関連の活動はイギリスの死傷者の大半が発生した

欧州戦線における英雄的行為にスポットをあてる傾向があります。その結果、原爆による攻撃への社会的な追悼、または核問題への社会的な考察はマンチェスター周辺ではほとんど行われていないようです。少なくとも、機会がなければ平和または核の問題に職業上または個人の関心事として関わることのない一般市民に対して、日本の体験の記憶と歴史を積極的に広める形では行われていません。このため、私は最後に平和首長会議が文字どおり施行しないまでも調査を検討しうる、簡潔な、また実際には難しい点もある、マンチェスターでの平和活動への提言をまとめました。

戦争における苦しみにまつわる人間的なストーリーについてあまり時間を費やして考察したことのない、上記のマンチェスター市民の多数派に声を届けるには、あらゆる平和活動を美術館、市庁舎、宗教施設などの特定の公共空間の閉ざされた扉の外側へ、人びとが日常の活動を中断する形で人間的な紛争の記憶に会えるような、オープンで人通りの多い公共の場所へ移すことが有効だと思われます。可能であれば、平和首長会議事務局の努力により完成の域に近づきつつある被爆者のビデオ証言という素晴らしい資料を、あちこちの有名な公共スペースでプロジェクションを通じてマンチェスター市中心部の一般市民に届けられれば、きわめて大きなインパクトを与えるでしょう。概念を説明によって一般化して伝えるのは難しいので、実例を以下に挙げます。広島または長崎の爆心地に最も近い場所にいた被爆者の証言ビデオクリップに続いて、マンチェスター中心部の爆撃の生存者によるビデオ証言がピカデリーガーデンズ中央のコンクリート壁に映し出されます。関心をもった観覧者はさらに QR コードでその他の展示やさらなる情報、並びに例えば、「トライデントの弾頭 1 基には広島に投下された原爆の約 30 倍の破壊力がある」など、イギリスの現在の核能力を知ることができます。その他の場所では、被爆者の証言は、例えば同じ職業、研究、関連する場所など、類似点のあるマンチェスターの証言と結びつけられたいでしょう。プロジェクションが不可能な状況または場所では、博物館内と同じく、その他の媒体を使って公共の場で証言を伝えることもできます。私の提案の意図するところは、普通の人びとのストーリーをより幅広い多様な普通の人びとの集団に伝えることです。原爆が犠牲者を選別しなかったのと同じで、原爆の生存者とマンチェスターの生存者の体験談は、博物館に行かないタイプの社会集団にそれとなく伏せられるべきではありません。だからこそ、公共スペースにおけるプロジェクションは都市への爆撃への考察を広げる可能性があるもう 1 つの方法になるのです。